文学の聖地「伊豆」と温泉
～癒しを求めた文豪たち～

ストーリーの概要

伊豆の湧き立つ湯の香り、四季の移ろいで表情を変える山々、渺漠（びょうばく）たる海は、多くの文人・墨客（ぼっかく）を引きつける。伊豆を訪れた文豪の名を連ねるだけでも、日本文学の歴史となる。伊豆に逗留（とうりゅう）し、名作を生み出した文豪も多く、伊豆が舞台となった作品もある。

文豪が心を癒し作品を生み出した旅館、様々な作品に描かれた情景は、今なお各地に残る。川端康成の名作『伊豆の踊子』は、その代表例である。

作品が生まれた当時のままに残る旅館を発ち、天城路をたどれば、そこには作品に描かれた「天城越」の世界が広がる。

トピック

湧き立つ湯の香

湧き出る温泉を実感
「走湯温泉跡」
（熱海市）

●伊豆は、出で湯の地である。

●熱海市の走湯温泉跡では、温泉が湧き出す様子を体感でき、江戸時代には熱海から将軍家に温泉が献上された。

●この地は、古くは歌人を引きつけた。走湯権現（伊豆山神社）には、平安時代の女流歌人・相模が百首歌を奉納しており、十国峠には、鎌倉幕府3代将軍源実朝が沖に浮かぶ初島を詠んだ歌碑が建つ。

文豪の足跡

文豪の足跡を辿りながら、一休み
「起雲閣」（熱海市）では、
お茶も楽しめる

●文豪ゆかりの建物も各所に残る。太宰治等が執筆活動を行い、山本有三・志賀直哉・谷崎潤一郎の対談が行われた熱海市の起雲閣、坪内逍遙の別荘「双柿舎（そうししゃ）」は、その代表例である。

●武者小路実篤が滞在した伊豆長岡温泉のいづみ荘、芥川龍之介が滞在した修善寺温泉の新井旅館。夏目漱石が療養した菊屋も一部が残る。文豪の足跡が巡れることも伊豆の魅力の一つであろう。

『伊豆の踊子』の誕生

天城路を往く踊り子と
「天城山隧道」
（伊豆市・河津町）

●伊豆を舞台とした作品の中でも、川端康成の『伊豆の踊子』は、その代表例と言えよう。

●天城トンネルが開通し、「天城越え」をする下田街道が多くの人々の往来で賑わいを見せていた大正7年（1918）の秋。一人旅で伊豆を訪れた19 歳の学生・川端康成は、伊豆の旅で踊子一行に出会う。

●この出会いが、『伊豆の踊子』を生み出した。

文学の聖地へ

井上靖の小説「しろばんば」に
登場する「上の家」（伊豆市）に
は、川端康成も訪れた

●川端は、生涯この地を愛し、地元の人々との親交を深めた。幼少期をこの地で過ごした作家・井上靖の家族との交流では、囲碁を打ち、ヤマメを御馳走になった。

●執筆中の川端を慕い、梶井基次郎や宇野千代など多くの作家が訪れ、この地の旅館に滞在した。湯ヶ島が「文士村」となった背景には、文化を育てる気概を持つ温泉旅館経営者の存在が大きい。

文学の聖地を彩る構成資産

●文豪と伊豆の結び付きを物語る5市町（伊豆市、河津町、熱海市、伊豆の国市、伊東市）に所在する 29 件の文化財が構成資産

構成資産１～川端康成と『伊豆の踊子』～

川端康成（1899～1972 年）
伊豆滞在中に「伊豆の踊子」を執筆

●伊豆を舞台とした作品の中でも、川端康成の『伊豆の踊子』は、伊豆で生まれ、伊豆を舞台とした名作の代表例と言えよう

●作品が生まれた当時のままに残る旅館を発ち、天城路をたどれば、そこには作品に描かれた「天城越え」の世界が広がる

①湯本館（ゆもとかん）　伊豆市湯ヶ島

宿泊者のみ見学可

●踊子が玄関で踊っているのを川端が階段から眺めていた宿
●川端が長期逗留し『伊豆の踊子』原稿の執筆も行われた

【訪れた文士】

川端康成、尾崎士郎、宇野千代、若山牧水、広津和郎、萩原朔太郎等

≪国登録有形文化財≫

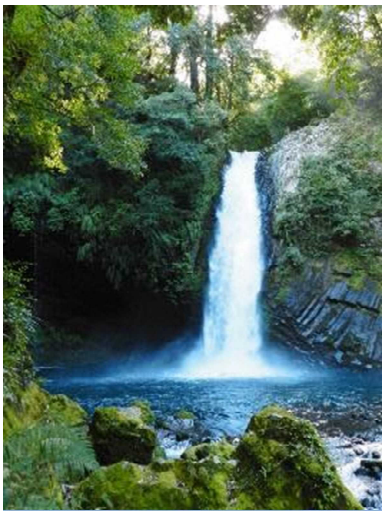
②落合楼（おちあいろう）　伊豆市湯ヶ島

宿泊者のみ見学可

●明治 14 年（1881）創業（現:おちあいろう）
●川端が旅館の庭を訪れたり、旅館の2階の客を眺めたりしていた

【訪れた文士】

島崎藤村、田山花袋、木下杢太郎、北原白秋等



③湯道（ゆみち）　伊豆市湯ヶ島

●少年時代を過ごした井上靖や、湯ヶ島を訪れた川端はじめ多くの文人もここを通って旅館などを行き来した

④浄蓮の滝（じょうれんのたき）　伊豆市湯ヶ島

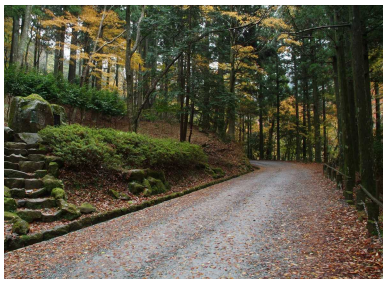
●伊豆を代表する滝で、川端も訪れている。文学作品の舞台として登場する
●伊豆の踊子像が建てられており、踊子歩道の起終点になっている

≪国重要文化財≫

⑤旧天城トンネル（天城山隧道）　伊豆市湯ヶ島・河津町梨本

（きゅうあまぎ　あまぎさんずいどう）

- 明治 38 年（1905）通行開始。全長 446m の石積みトンネル
- 学生・川端と踊子一行も通っており、『伊豆の踊子』の物語はこの峠から始まる
- 井上靖の『しろばんば』等多くの小説に登場する



⑥踊子歩道　伊豆市湯ヶ島～河津町湯ヶ野

（おどりこほどう）

- 踊子一行が歩いた道。伊豆半島を縦断する下田街道の一部分
- 浄蓮の滝から旧天城トンネルを経て湯ヶ野温泉へ続く道（18.5 km）は、今なお小説に登場する自然や風景が残り、ハイキングコースとして整備されている

福田家の文学碑

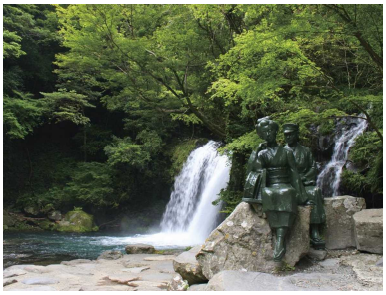
踊子歩道沿いの碑

梶井基次郎文学碑

⑦文学碑　伊豆市湯ヶ島・河津町湯ヶ野

（ぶんがくひ）

- 文人墨客が訪れた記念として、踊子歩道を中心に建立されている
- 踊子歩道沿いには、「川端康成文学碑」（伊豆市）、湯ヶ島の西平地区には、「梶井基次郎文学碑」（伊豆市）、福田家にも「伊豆の踊子文学碑」がある（河津町）



⑧河津七滝　河津町梨本

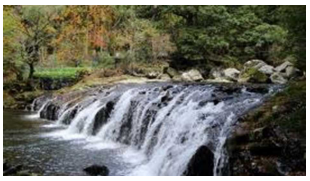
（かわづななだる）

- 河津地方の方言で滝を「タル」と呼ぶ。踊子歩道沿い河津川の 1.5 kmの間に点在する７つの滝の総称。小説の舞台にもなっており、初景滝には「踊子と私」のブロンズ像がある

⑨二階滝　河津町梨本

（にかいだる）

- 踊子歩道の寒天橋のすぐ下にある二階滝は高さ 20m の名瀑
- 真夏でもとても涼しく、秋には紅葉がきれいなところ



⑩平滑の滝　河津町梨本

（ひらなめ　たき）

- 踊子歩道沿いにある幅 20m、高さ 4m の滝で、大きな１枚岩を滑り落ちる様から名付けられた

⑪福田家　河津町湯ヶ野

（ふくだ　や）

- 明治 12 年（1879）創業『伊豆の踊子』執筆のきっかけとなった伊豆の旅行で3泊した宿で、作品にも登場する。川端が泊まった部屋には直筆の色紙などが飾られる

【訪れた文士】
川端康成、中島敦、太宰治、島崎藤村、
田山花袋、蒲原有明、梶井基次郎等

資料館（福田家館内）
料:300円（宿泊者無料）
休:要事前確認
問合せ先:0558-35-7201

構成資産２～井上靖作品の舞台～

井上靖
幼少期を湯ヶ島（伊豆市）で送る

●川端康成と家族ぐるみの交流があった井上靖は、少年時代を伊豆で過ごした

●自伝的小説である『しろばんば』等、伊豆を舞台とする作品を残した

⑫上の家（井上本家）　伊豆市湯ヶ島

●井上靖の母の実家で、小説『しろばんば』に登場する

●井上靖の祖父・文次は、川端の囲碁仲間で、川端も訪れていた

基本的に毎月第１土・日、第３土・日に公開（10:00～15:00）
料:（協力金）400 円　　駐車場:天城会館（無料）

⑬井上靖旧邸跡　伊豆市湯ヶ島

●井上本家から 30m ほど離れた場所に位置していたが、伊豆近代文学博物館の横に移築された

●薬窓がある等、医者の家らしい佇まいを伝える造りとなっている。小説『しろばんば』に登場する

⑭伊豆近代文学博物館所蔵資料　伊豆市湯ヶ島

●伊豆近代文学博物館には、伊豆の文学に関係する文人約 120 名の資料等が展示、保管されている

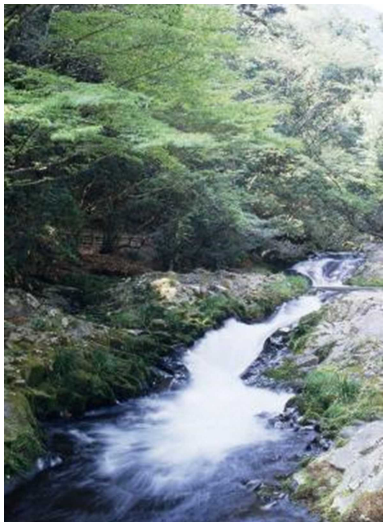
●川端や井上が執筆した原稿も見ることができる

時:8:30～16:30　休:第３水曜日　料:大人 300 円、小人 100 円

≪県指定天然記念物≫

⑮天城の太郎杉　伊豆市湯ヶ島

●滑沢渓谷内にそびえる天城山中で最大の巨木



⑯滑沢渓谷　伊豆市湯ヶ島

●井上靖の処女小説『猟銃』の舞台になった場所

●天城山系を源とする清流が、安山岩の一枚岩の上を侵食しながら流れている

⑰わさび田・わさび料理　伊豆市・河津町

- 踊子歩道沿いにはわさび田が点在
- 川端は伊豆を代表するものの一つとして「わさび」を挙げている。井上も伊豆のわさびを称賛する『わさび美し』を残している

⑱鮎料理　各市町

- 狩野川は、鮎の友釣り発祥の地と言われている
- 川端も伊豆滞在中に夢中になったと後の作品で語られている
- 塩焼きのほか、甘露煮、干物等の料理がある

構成資産３～様々な文豪ゆかりの地～

- 伊豆には、数多くの文豪が訪れた
- その名を連ねるだけでも、近代の日本文学の歴史となる

≪市指定有形文化財≫

⑲起雲閣（旧内田信也及び根津嘉一郎別邸）　熱海市昭和町

- 山本有三・志賀直哉・谷崎潤一郎の対談が行われたほか、三島由紀夫が新婚旅行で訪れ、舟橋聖一、武田泰淳等がここで執筆
- 別館で太宰治が『人間失格』を執筆

時:9:00～17:00（入館 16:30 まで）　休:水曜日、12/26～30　料:大人 610 円、中・高校生 360 円

≪国指定天然記念物≫

⑳阿豆佐和気神社大クス（来宮神社大クス）　熱海市西山町

- 坪内逍遙が『役の行者』の着想を得た場所

㉑双柿舎　熱海市水口町

- 坪内逍遙が晩年移り住んだ
- 当時庭にあった2本の柿の古木から、その名がつけられた

土・日曜日のみ開館
時:10:00～16:00　料:無料

㉒野村塵外荘　熱海市海光町

- 高山樗牛が滞在、「塵外」は樗牛の手紙から名付けられた

※非公開につき、敷地外からの見学に留めてください

≪市指定史跡≫

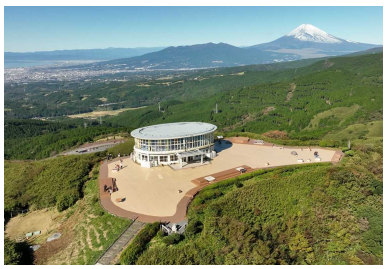
㉓走湯温泉跡（はしりゆおんせんあと）　熱海市伊豆山

- 相模、源実朝等、多数の文人が訪れた走湯の源泉跡
- その名のとおり、温泉が湧き出る様子が体感できる

㉔伊豆山神社（走湯権現）・伊豆山郷土資料館（いずさんじんじゃ　はしりゆごんげん　いずさんきょうどしりょうかん）　熱海市伊豆山

- 源実朝を始め、多くの歴史上の人物が参詣した伊豆山神社
- 郷土資料館では、神社に関連する資料が実見できる

伊豆山郷土資料館
時:9:00～16:00　料:大人 180 円、中・高校生 120 円
休:水曜日（祝日の場合は翌日）



≪国登録記念物≫

㉕十国峠（じっこくとうげ）（日金山（ひがねさん））　熱海市伊豆山（展望台は函南町）

- 源実朝が初島を歌に詠む
- 太宰治『富嶽百景』、高山樗牛『わが袖の記』がここからの富士山の眺めを絶賛

いづみ荘 HP から

㉖伊豆長岡温泉いづみ荘（いずながおかおんせんそう）　伊豆の国市長岡

- 武者小路実篤が『愛と死』を執筆した宿
- 実篤が滞在した部屋が残る

伊豆武者小路実篤文学館（いづみ荘館内）
一般見学可【要連絡】055-948-1235
時:9:00～20:30　料:大人 500 円、子供 300 円
実篤が滞在した部屋も一般見学可【要連絡】

≪国登録有形文化財・市指定史跡≫

㉗木下杢太郎記念館・木下杢太郎生家（きのしたもくたろうきねんかん　きのしたもくたろうせいか）　伊東市湯川2丁目

- 北原白秋や吉井勇らと深い交流のあった木下杢太郎の生家
- 杢太郎は、『伊豆伊東』、『海の入日』など伊東を題材にした作品を残し、伊東小学校の校歌を作詞した

開館:9:00～16:00（4 月～9 月 16:30）　※駐車場なし
休:月曜日（休日の場合は翌日）
入館料:大人 100 円、小人（中学生以下）50 円

≪国登録有形文化財≫

㉘新井旅館（あらいりょかん）　伊豆市修善寺

- 芥川龍之介が心身の疲労を癒すために滞在
- 風呂嫌いの芥川がお薦めしたお風呂に現在も入浴できる
- 同時期に泉鏡花夫妻も同宿していた

宿泊者のみ見学可
うち希望者を対象とした文化財ガイドあり（無料）
時:10:00～　16:00～（各 15 分程度）
※実施しない日時あり

㉙夏目漱石記念館（なつめそうせききねんかん）　伊豆市修善寺

- 胃かいようの転地療養のため、菊屋に滞在
- 滞在していた部屋（一部分）が現在、「修善寺虹の郷」内に移築されて、「漱石庵」として公開されている

修善寺虹の郷
時:10:00～16:00（4 月～9 月•3月 17:00）　休:火曜日ほか（繁盛期営業）
料:大人（中学生以上）1,220 円、小人（4歳以上）610 円、伊豆市民無料
※駐車場有料

文学の聖地へ

- 伊豆では、様々な文学関連のイベントが開かれ、文化伝承と創造による地域づくりに取り組んでいる

【主なイベント】
- 「伊豆文学フェスティバル」（県東部•伊豆各地）
- 「伊豆文学まつり」（伊豆市）
- 「『伊豆の踊子』読書感想文コンクール」（河津町）
- 「坪内逍遥忌記念祭」（熱海市）
- 「尾崎紅葉祭」（熱海市）、「杢太郎祭」（伊東市）

伊豆の国市で開催された文学イベント（令和5年度）

新たな文豪～伊豆文学賞～

- 静岡県では、「伊豆文学賞」を設け、県の風土や地名、行事、人物、歴史等を題材にした文学作品を募集し、伊豆を含めた県東部で入賞作の表彰式を開催する等、新たな文学や人材の発掘を行っている
- 伊豆の旅館•温泉から新たな作品を生み出し、新たな文豪として名を連ねるのは、伊豆を訪れたあなたかも

- 令和5年度第 27 回伊豆文学賞の最優秀賞「破城の主人」の舞台は“相良城”
- 相良城は、しずおか遺産「田沼街道とまぼろしの城」でも紹介

【しずおか遺産「田沼街道とまぼろしの城」の概要】
- 田沼意次の居城相良城と田沼の名を冠する街道沿いの文化財 23 件を紹介するストーリー

相良城跡に立つ田沼意次像

『文学の聖地「伊豆」と温泉～癒しを求めた文豪たち～』のストーリー

○湧き立つ湯の香り

伊豆は、古くから出で湯の地であった。熱海市の走湯温泉跡では、温泉が沸き出す様子を体感できる。また、近くにある走湯権現（伊豆山神社）には、歌人相模が百首歌を奉納しており、伊豆の温泉の歴史は、遅くとも平安時代には確実に遡る。江戸時代には熱海から将軍家に温泉が献上されており、現在も、伊豆の各地で温泉は人々を癒している。

湧き立つ湯の香り、四季の移ろいで表情を変える山々、渺漠たる海は、多くの文人・墨客を引きつけた。坪内逍遙、夏目漱石、芥川龍之介、太宰治、三島由紀夫、井伏鱒二など伊豆を訪れた文豪の名を連ねるだけでも、日本文学の歴史となる。

伊豆に逗留する中で、名作を生み出した文豪もおり、その中には伊豆が舞台となった作品もある。時代が移り行く中で、文学に描かれた伊豆の情景は、人々の心に焼き付き、文学だけではなく、映画、アニメ、歌謡曲等、様々な作品で、今なお伊豆は舞台となっている。

○伊豆に残る文人の足跡

文豪が心を癒やした建物、様々な作品に描かれた情景は、今なお各地に残る。

熱海市の起雲閣では、舟橋聖一、武田泰淳、太宰治が執筆活動を行い、山本有三・志賀直哉・谷崎潤一郎の対談が行われた。熱海市の阿豆佐和気神社大クス（来宮神社大クス）は、坪内逍遙に『役の行者』の着想を与え、函南町と熱海市にまたがる十国峠は、古くは源実朝が沖に浮かぶ初島を歌に読み、太宰治、高山樗牛が富士山の眺めを絶賛した。熱海市内には、坪内逍遙の別荘「双柿舎」や高山樗牛が滞在した「野村塵外荘」が残る。

伊東市には、温泉街の近くに詩人木下杢太郎の生家が残る。伊豆の国市には、伊豆長岡温泉のいづみ荘に、武者小路実篤が滞在した部屋が残る。

伊豆市の修善寺温泉には芥川龍之介が滞在した「新井旅館」や、夏目漱石が療養に訪れた菊屋の一部が「虹の郷」に移築され、資料館として公開されている。

尾崎紅葉の金色夜叉、井上靖のしろばんば等、伊豆を舞台とした作品の中でも、現在の伊豆市を訪れた川端康成が滞在中に生み出した「伊豆の踊子」は、伊豆で生まれ、伊豆を舞台とした名作の代表例と言えよう。

作品が生まれた当時のままに残る旅館を発ち、天城路をたどれば、そこには作品に描かれた「天城越」の世界が広がる。

○『伊豆の踊子』の誕生

大正７年（1918）の秋、傷ついた心と体を癒すため、一人旅で伊豆を訪れた 19 歳の学生川端康成。

この頃、東京から比較的近い温泉地である伊豆は、東海道線や全国初の道路隧道として天城トンネル（天城山隧道）が開通し、「天城越え」をする下田街道（三島市～下田市へ至る街道）ルートは多くの人々が往来し賑わいを見せた。

このような時代背景の中、学生川端は、伊豆の旅で踊り子一行に出会い、川端を代表する文学作品のひとつである『伊豆の踊子』が誕生した。

○『伊豆の踊子』からはじまる文学の聖地化

川端は、生涯この地を愛した。その理由は、地元の人々とのふれあいにある。幼少期をこの地で過ごした作家の井上靖の家族との交流では、井上家（現、上の家）で囲碁を打ち、ヤマメを御馳走になった。

この地を愛した川端は、『伊豆の踊子』以外にも多くの文学の足跡を伊豆に残した。

執筆中の川端を慕って梶井基次郎、宇野千代といった多くの作家が訪れ、この地の旅館に滞在し、川端は、宿の主人に「文士がこれだけここを訪れるのは僕のおかげだね。」と語る。

文人たちは温泉場を結ぶ「湯道」を通り各旅館や共同湯などを行き来した。「湯ヶ島文士村」さながらの地となった背景には、広く文化を育てる気概を持つ温泉旅館経営者の存在は大きい。

特に川端が常宿としていた「湯本館」や「福田家」は、当時の建物のまま営業が続いており、川端が滞在時に必ず使用した部屋もそのままに、自筆の色紙などが残されており、目にすることができる。

伊豆市の道の駅「天城越え」にある伊豆近代文学博物館には、当地ゆかりの作家に関する貴重な資料などが展示され、生原稿も見ることができる。「川端康成」をはじめとする多くの作家と関わりを持つ伊豆は、「日本近代文学の聖地」と言えるだろう。

○天城トンネルの開通と踊子歩道

伊豆半島の南北を屏風のように遮る急峻な天城山は、交通の難所となっていた。

明治37年（1904）の天城トンネルの開通は、特に伊豆半島の南部の人々の悲願だった。天城トンネルは、現存する国内最長の石造トンネルで、当時の高い建設技術を物語る貴重な近代土木遺産でもある。

春の新緑、夏のトンネル内部に滴り落ちる冷たい雫、秋の紅葉、冬の天井に下がる長いツララ、移ろいゆく天城山の豊かな自然と調和するトンネルは、踊り子一行が歩いた当時と変わらない姿である。

徒歩や馬車で往来していた街道も、大正５年（1916）にはバスが運行し、地域はさらに活気づいた。踊り子一行が歩いたのは、この頃である。当時、険しかった道も、現在は、ハイキングコース「踊子歩道」として整備され、スギやブナ等の木々に覆われたつづら折りの歩道沿いには『伊豆の踊子』の文学碑や川端のレリーフを始め、文学作品の舞台にもなっている滑沢渓谷があり、浄蓮の滝や河津七滝、二階滝、平滑の滝を始めとする大小様々な滝、谷間のわさび田等、踊り子一行が歩いた頃と変わらない風景が残る。滑沢渓谷に聳える、天城の太郎杉は、天城の森の恵みを象徴する山中最大の巨木である。

川端や井上の作品の中に登場する豊かな自然は、伊豆ならではの食を育んだ。天城山のもたらす清冽な水を活かし、山中の渓谷には、石組みのわさび田が連なる。その栽培方法は世界農業遺産にも認定されている。わさびをたっぷりと使った「わさび鍋」や「わさび丼」は、地元ならではのわさびの楽しみ方である。

わさびを育てた豊富で良質な水は、川となり山を駆け下りる。半島中央部を流れる狩野川は、友釣り発祥の地とも言われ、鮎釣りが盛んであり、鮎の一夜干しや甘露煮のほか、鮎うるかとよばれる塩辛も名産となっている。伊豆の旅館の中では、わさび料理や、鮎料理が欠かせない魅力的なおもてなしとなっている。

○文豪の足跡を辿るたびと伊豆文学賞

伊豆の風景は、遥かな大地の営みが創り上げ、文学作品によって彩られてきた。

とりわけ川端や井上は、この地の人情と風土を題材とした作品を多く残した。後年、川端は『伊豆の踊子』に天城山の風景や自然を描写しなかったことを第一の不満として語っていることは、川端がこの地の風土に対する愛着が窺えるエピソードである。伊豆をこよなく愛した川端の『伊豆序説』には「天城越えこそは伊豆の旅情」とも書かれている。

文豪も堪能した伊豆の温泉と食文化を旅館で体験し、地域に残る文学碑を巡り、今なお残る当時の旧街道と美しい渓谷を散策しながら、天城トンネルを抜ければ、明るい南国の空の下、本物の踊り子一行に出会えるような気分になるだろう。

伊豆では「伊豆文学フェスティバル」や「伊豆文学まつり」、「『伊豆の踊子』読書感想文コンクール」、「坪内逍遥忌記念祭」、「尾崎紅葉祭」、「杢太郎祭」などの様々な文学関連のイベントも開かれ、文化伝承と創造による地域づくりに取り組んでいる。さらに、静岡県では、『伊豆文学賞』を設け、県の風土や地名、行事、人物、歴史などを題材にした文学作品を募集し、入賞作の表彰式を伊豆を含めた県東部で開催するなど、新たな文学や人材の発掘を行っている。

伊豆の旅館・温泉から新たな作品を生み出し、新たな文豪として名を連ねるのは、伊豆を訪れたあなたかも。

しずおか遺産

「文学の聖地「伊豆」と温泉

～癒しを求めた文豪たち～」

代表連絡先

担　当　伊豆市教育部社会教育課
電　話　0558-83-5476
E-mail　bunka@city.izu.shizuoka.jp
住　所　〒410-2592
静岡県伊豆市八幡500-1